勢力圏日記

後篇

二

へ遺13
962
7

帝国図書館蔵
遺13
962
巻 7

朝顔日記巻之五　故芝叟遺話

柳浪著

十一回　諫

世の常言よくいふる。會ハ別れの端とやらむ。秋月が女児深雪ハ。そゝらずも日頃慕へる阿蘓次郎と。明石の浦の船の上にて。邂逅に環會。二世のちぎりを約し。即時情郎に志たがひて。奔て去んと支度せしが。事あらはれてその船。ふハうに駛出せしかへ。さてろ所らずも。父弓之助と共に筑紫に下て。落陵の邸ふ歸住。深室に閉籠てぞあるける。物たもふ身ハ。そゞ故郷の天所がら。旅ふ〳〵まさる憂に耐て。そゞ

背ハいふまでもなくたまひけん。さぞかしらハを。誠ふれものとやねばをらん。這方ハ一をぢゑ戀ひ来しもの哉。誓ひてしかねおとハとやゝ忘もやまたまひけん。即君ハ情多きものとしきけバ。宮古の花ようへうひましけんこそ。腹だゝしけきふど。とざまかうざまふふくたもひかゞまゝ。夢をぞはしきうゑ蘇鳥あぐふ音に啼難面よ。ひとうかとしく袖が浦。いつゝハ君よ藍の島海の中道ふゝくふ。蘓老松林風絶て。そよとばゝゝの信もなし。かくまでわくがまたるにもゝふやあゝけん。早晩心地さへ例ふらず。三伏の熱き日も常ふたゞ、簾罩てのゝ過しける。深雪ハ今宵了鬢浅香

ふ吟附て。簷端の簾子ふゞゝれく捲せ。端ちゝく居て欄干ふ靠ゝ。せめてもの心やゝふと。外面をうち眺きバ。及時池の蓮花の盛開れるが。えゝらゝ飛香の一陣くゝばく。鼻を撲来ゝぬ。いと清らふる水の湄ふきバ夜の更るふゝとがひ。何とれく露けくおぼゆるふ。水草の葉末よゝハ。秋の螢の四個五個でゝゝいとよゝく ふく飛ゝあゝさま。されがら青き光どもの滅ゝてるぞ。ものゝびしくゝゝれげる。あハをれゝける。そぐろふ越方のふのゝきて。看もの聞ものふをけて。涕泗ををよはす媒とハれゝけらし。

よるとふるほたる哉ゝてもさひしきハ時そくもふきおもひ

ぬ。ぬ。ぬ。と古歌ふど吟じて。いもねらをず。只顧悲嘆ふ
くま竹のふしまちの月もほのらきいづをバ。ほど〳〵史
人の面影さへ幻ようびつ。墻根よそとく蛩の切〻唧〻
く聞ゆるハ。よもをぐら我よともふひてや泣あらすらん。
過し明石の揖枕。月の下臥ひまもなく。逢瀬ふさ〻み
萍の生憎嵐よ吹散さを。夜〻ならぬ船〻と。影ハそなたよ
有明のあけてふをずもくふを来て。よるべとかとつふの
うき身。ふ〻ろはくしふさをらへて。たぐをぐ背子をたづね
をび。魂ハ雲井の餘所を翔。夢ハ関路の千里を往還。と
もををバ世をあぢをふを。時あをてい身を怨じつ。げよや
死てをうく今般よを。生別離ほど悲をものハあらじと。

上古の詩にいひけんも。今をぐ上よ比へに〻。只管哀慕
の情ふたへて。袖もく水を堰あへをとゝやさても在鎌倉
の秋月弓之助い女孩児ぐかくる情痴といえも志らず。さ
をどまたいつぞや。明石の浦の船の上よて。深雪ぐ艶簡
ゆくものと海よ投。志ををて悲嘆よ沉をたる風状ぬ
あやしを。もしやいかいせし。意中人のあをて。戀慕
の餘志らせしからんゆたとひ渠ぐ志〻ふものハいろは
ぐやおとをを人ぬをとも。よも駒澤ぐ標致よいふよ
ばし。女孩児深雪ハをづゆよ深窓よひと〻ぬをバ。眼
界また寛ゆらを。我四十年来天下よ奔走せしかど。
いまぐ駒澤おとき。才貌双全たる人ぬ見ず。さをバ

渠もし一田駒澤とあひ見るふいたらバ。極めて推辞む
ふといおらじ。と此趣状ゑ縷々とふたくも一封の家
書と走卒ゑ齎せをいそぎ本國筑前へ差しける。路
陵なる秋月弓之助ゞ邸ふハ。渾家の水青信くふく。
良人の留主をまもゑ。日ゝとその消息を待ゑびてあ
ゑけるゑ。今日しも奴ゞ鎌倉よゑ御使よまいきゑ
とて。了頭どもゞその書函をとゝ出しぬ。水青ハ良
人の書信ゑとゑあげて。まづ平安とあるゑ安堵。や
とら緘れしきゑて熟く讀了。一たびハ悅び一たびハ
愁る面持ゑ。悅べるものハ。佳婚を得たるゞもへゑ。
愁ふるものハ。女児ゞ別ゑ意中人あゑて。ねゐ戀慕

態ゑ猜しゝみるゑて。愁ひよいひ出しゝゑバ。いゝゑる怯
事とゞ仕出来ゑんと。おもひとろる故ゑ。さるに
よゑて水青いよくゝ思案を凝しゝ。いづを女児を
諭して玉ゑ成へんゑハふうゞと。聽て乳媼の真柴を
套房にゑびよせ。うちひそめきて商議せゑ。了翠浅香
ハ少黠ものゑて。隅禎よおを漏聞。隨即深雪ゞ蘭房
ゑ走もき。喘吁く小姐。適間鎌倉よゑ御音信のいらひ
ふハ。ふろゝのおとよもべると。一五一十耳語けをハ。深雪
ハ聞よゑ胸ゑぶを。呆をて半晌口を開うず。ゑの時浅香
ハ。内房より呼をて起もをぬおとよ深雪ハひとゑお
ち。原来かゝる憂事を聞んはしゝ。前宵の夢見のち

かゝつる。比先ハ君侯の御声ゞゝまて。肚裏ゝ染ぬ
詰号ゝ遇幾年月の苦ゝ病しゞ。不料笆虬之進ゞ暴
ゝ病て亡たるゝぞ。天幸一頭の煩悶を除ぬ。さもあ
るゝへハゝやく。情郎ゝ偕老と。佛ゝ祈ゝ神ゝ願そ
きと力ゝあだる二光ゝとくゝゝふれもひきや。今日
の御書信ゝ駒澤殿とやらんゝ。新婚せよと強面ゝる
父の命ゝ自来ゝらハゞ身ゝハふゝく山盟海誓し人
あゝて。いゝゝる義理約束のあるゝゝも。露ゞゝゝも
猜したまいて。ゝらハゞまゞ允諾もせぬものゝ。てや許
配をゝさせたまゝとや。愛慈ゝきゝふさゝゝうさと。往
年ハ君侯と恨ゝ。今日ハまた父ゝ恨ゝ。其儘そゝゝ倒き

ふし。夫ゝあまきゝ。双の袖ゝ顔ゝれしゝて。ゝゝと啼
出しけゝ。ゝゝべて情ある女子の態ゝゝゝ。母の水青
ハゝの挙動をさし覗き見て。傍ゝ人ゝきゝ幸とせ
きばらひゝゝしゝく深雪ゞ房ゝ入けゝバ。深雪ハ慌
居ゝゝり。襟刷くろひ泣ぬ顔ゝとゝゝせども。究轉た
る愁容。正ゝゝゝ玉顔寂寞として。涙闌干たゝと
いへる光景ゝゝ。水青ハやとら。側ゝる琴をゝしのけ。
ちゝ〳〵とゝそひ。泣吃せる女児ゞ背かひ撫けく。道理
よゝとの慈言。かく背夫のひたる女児をバ。春まゞゝ白
履子のおとれもふも。児ゝハゝもゝき親心母水青ゝ
やゝやゝ深雪そのやゝふしつゝるハ。浅香ゞゞ失口ゝて

婚姻のことゞ聞きゝ初ら人今まであらはなこそいね。
汝の肚裏よ戀人のおいすきとをハ。こくよ至も猜しゝ
ぞや。たもひよらぬ今般のこゝ。汝ハ心よ染ぬ姻縁とや
たりゝ。且ゝの父上の御文と見ね。媚といふハ鎮西の探題
六箇國の主大内介様の御家老。駒澤次郎左衛門殿とて
三千石の秩禄知。弓箭剣鎗把てハ。鑓倉一の武夫ぬは
よし。且文道よもかしこく。萬の役藝什芸一個會せ
ぬとゝとなく。剰世よ希れる美丈夫よて。天禀て
眉清目秀。色ハ雪よ至白く。標致氣骨傑黙れる人表
分よ過とる。佳婚と得さ至ふゞ。あの嚴確父上の。ゝの
やうふ器量のゝしまで。精細ふかゝせたまひき。加旃の

駒澤殿の人品ゝ賞ひ。御麾下の世胃かさよ至。女児と
賜さん妹と妻さんと。方くよ至懇望あ至しかゞ。
駒澤殿いうれるゝとふゝ。一緊て固く辞えゝさきし
ハ。鑓倉中の風説ふをバ。永人も玉成ことたがつゝか
ゝと。躊躇ゝ。おもこそ月老の結ぜたまゝ赤縄
ふや。這方よ至いひ入るやいる。速よ承知あ至ゝとよ
さきバ父上の命と畏こ。こやく承引てたびね。さも
あをバ親孝行。且ハその身の冥加ぬ至。汝が戀人と
つゝハ。比先宇治の螢狩よてたゞ一たび見もし見らき
もゝたる。宮城阿蘓次郎ぬゝのゝとぬるべし。その人
ハ浪人といひ。別来弗よ動静も聞ず。ゝとら責僧

秋月弓之助が
妻水青女深
雪に雁失こも
顯して多方
庭訓とくハへ
駒沢許へ嫁
せんと嫌ゆ
ところ

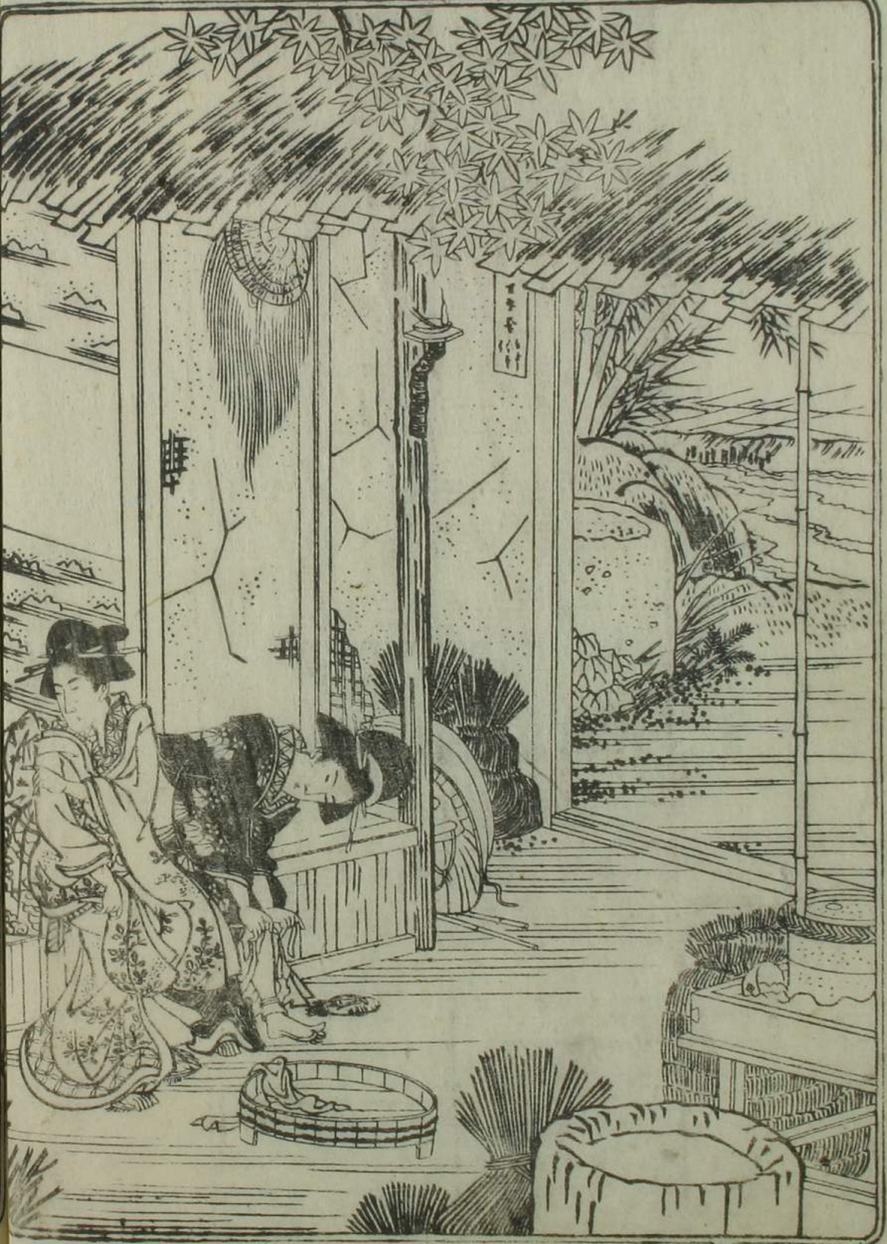
雞庵めゞ騙局など、百般の障礙あるきかくろ齟齬あるハ、必竟おも縁の無ゞ故ならん縁ある時ハ千里の外もあひ遇ふらひ、恰ど今般の駒澤どのゝごく、いらてやく事旬こそ、赤縄のあるといふ證據なき、さいの利害なよく辨明よ、鬼よも蛇よもあらぬ母ゞ、なでう無仁の處置なれをべき、さハあを蓋をいてねバ理ゞ聞えぬといふ世の譏、縁有無の縁由といふハ、現在の此母ゞ身の上、十八年来ゝを来しも、今愛子の可憐よ愧なことをもてかとるぞよ、ともいまゞ少艾しさ紀、乳母ゞ媒ふよりて、嬾氣のいたりの後先見ず、母家の間壁なる、凡生主水といふ、武士ふ人志をず契をも、末の松山浪あすとも、互の盟ハ違しと、もろもふふくれもひしおを、一年餘を過せしうち、汝の為にハ祖父君、ゝゞ父宇佐美弥五右衛門殿、一日御城よりを退朝たまひ、母上よ仰すやう、今日ハ不圖御前よて君侯某をちゝく召を、汝ゞ女児水青、そや桃夭のふろおをバ、幸秋月弓之助とハ對くの門戸、年紀も似合きよし、弓之助ハ弱冠おを、ども緊利発おろものふり、婚ふ取て不足ハあらじ、予ゞ媒よて婚姻申ほくるぞこ感佩御上意、弓之助ゞ人品家風ハ従来望ところ、殊よ厳命ゝとゞけおく、早速謹諾まうしたを、主侯よも、満足よおばすとの御意よて、御酒をとゑ

賜さま、御勸あるけるゆへ、一時高興、よて歸しぞ。さあるをバ近日弓之助よて黄道吉日なるらび、納采なる贈来るべし。這方よも早く、その准備をふをべし、と嘻々よろこびたまへ、母上ハさらぬて、闔家ざめきて祝ひやせど、ときハそれよひきうへて、何が水の出端の嫩ざうて、あをと聞てたどろき、恰どそれとのやうふおもひたり。先ハ闇なる女心、ひとそぢの義理よ纏ひあるふもあらをず。あまてのやるうとれさふ、一夜墻を越て、隣邸よ志のびゆを、主水殿よ遇て、事の次叙をたぐらふ語て、ふハ何とせんと氣もそぐろ。浮沈よせまるとゞ身のうへ、いらふ取置たまふぞと、泣い

口説つせしうちよ、主水殿も十方ふくをしゝ体なるがやあてやうさるくいふハ是非もなき事體なる、知るごとく、我ハふの家の螟蛉子なて、那方とい門戸を相對バ、機と見て婚議申入んと挂念しゝ、さすがふ養母の膝下、ふをうれと心ならず遅滞て、今日の今といなてたり、嫡實の母親かをバ、こく耳ふもいをて商量をもるすべきと、かく延佇よふてしゝふをまでの縁よてあてたらん、まと和寮ハ君侯の御声かて、ふて、夫人新羅の前の、御主持とあをバ、等閑ならぬ重さふと、ふを全く天よてさづけたやふ因縁とふもの なて、我ハ今よて弗ふ、おもひきて侍てふん、和御寮

ハ忠と孝とのためよ。秋月許へ燕雨ハしたまへ。我よ
おいてハ。一点も念を遺ぞと。乾〻浄〻といひ放されし
ものへ。おもよ腹が立まひものゝ。たぼえず艾をさへほし
て。そハあまたハる薄情おふせうる。さらいゝ一たび
山盟海誓おとハをバ。法おもおもひあきらむるおといハる
たがさし。いざおもより何處へかとも。伴て退たゝ
ら。さらをバ今おの坐よて。君が刃よ貫うきて死るまし
くやく手ふかけて殺してたべと。種〻然かおちなれハ。
登時主水どのゝいとるふハ。そハ女の一途といふとのか
たに。真情ハさもあるべきおとハをバども。よく〻情由をとれ
まへたまへ。我ハ養子の身分。色よまどひて。義恩ふうた

母公捨。極重ハる義家の名跡と斷絶せしめ。またかけ
かまハねども。弓之助ふも。蠢巧の女と妻よしたたと。
世上よ咄をおと。おをやさ人情の。おのびざるとこるハこ。
孝義ハ天の道。色ハ人慾の私と聞。天の道を捨て人
の私と立るおとハ。我ハ得せぬかどふ。和御寮是非と
もふ死ハんとハらバ。早く回て。和御寮一個死たまへと。
世よたのもしげハき語ハ聞よたて。あまたのおとよ掃
興て。呆まどひて家ふ回て。熟右思左想よ。ひとり
死ねといふほどの薄僥郎よ義と立ぬき。不孝ものと
世よ笑るも詮ハきおと。あのやうハる薄僥郎ふル
ハ。来世の契もたのをハし。憎さも憎し主水殿への



憤激うとく、一向世間へきをぬうちふ、寧婚嫁して見せんと心ゝ決し。遂よ古の家の渾家とかゝしゞ、良人弓之助殿ハ謹嚴氣質ゝをバ、へと趣るくれゝに ふをてハ、心醉郎とて主水殿のことをも慕ひをきど、馴染といふものハ、まゝ格別ふるものゝて、いつゝ良人弓之助殿ゞ愛憐かゝ、やゞて海ゝ産しぞや、その後街心ゝて、主水殿と行遇ゝとあゝしかど、かの人も具妻とゝをて、いゝ慎ふゝく、いさゝら昔の風狀もせらをず。凝し熟もさめきゝて、よくく想ゝその時、主水殿不保いをさるゞ、武人の深切ゝてあゝしゝを、海ハまゝ阿蘇次郎主とハ、偕老の契ゝ結びるとゝでハゝし、宇治で

あひ見しまでのゝと、明石の浦のゝとをバ夢ふも志らねバ、かの人ハ汝のかやうふ、慕やるとも志らて、今ハ早妻むゝへせらをしもてらをず、ををバ下蔦の云ゝる、蛇の貝の汀想とやらん、徒よ想屈してゝさら花頽もうつろひてん、諄言ゝをども、さきふもいゝおもく、父君の御書ゝ駒澤ハ世ゝ冠絶たる風流雄ゝとといひ来したゝ、母もまた耻ともあゝすほどの、深意をときまへ、父母への孝行ゝよいゝてやく舊人を想斷、笑容駒澤へ花燭したもと、種くゝ説話たてらをて、女兒深雪ハゝの長語ゝ聞顔さへ得擡ず、泣志そぎきてゝをけるゞ、母の庭訓の骨膸ゝ浹、やゝくふ涙を拭ひ、羞澁さ、勿体

れさ、不孝の罪そら怖しく、既然母上の御語を諾ひ駒澤殿とやらんと嫁して、御慈悲ふかさ父君の御ちゝろ式安堵まいらせんと、身の過を悔たく声もかをゝる謝申せバ、母の水青ハふらく悦ぶ、さい出来せ玉健氣れ玉と、扇たて賞そやしぬ、おくて復書式去たくめて、さいをひと好便宜あるふ托て、此風趣をいひやるけるを、おもをりさた、鎌倉れる弓之助ゞ僑居ハ、氷人の所置ハて、駒澤方ハ玉納幣を贈り、来せしうへ、今又渾家水青ゞ家書らゞれて、女孩児も異議かく承引たる趣を出ていく安堵喜ぶとおぎ玉れし、さをども深雪ハ一心金石ハも堅く、阿蘓次郎ハ約し舊盟をまもて、そをがためハ節操を氷潔し他家へ嫁づく念ハ露むらもれく、あハをいふもしてふの家式志のひ出帝都ハますれる情郎ハ尋遇でやと、その便宜をゞ覘ひける、前の日母ハ允容の体ハもてなしたるハ、闔家ハ怠情とさせんとの私意れて、一夕深雪ハ一通の遺書式留ろ、黒夜ハ紛をて、落陵の邸式逃玉出、躊躇ハ帝都をさして奔玉ける、おを色膽と情痴とふあらをんバ、僅く破凡の深閨處子、いゝでたゞ單く行程萬里ハ赴くべき、水青ハ女孩児ゞ遺書を見るハ玉、忽地肝潰て、人心地もれく、慌忙人と走らせて追ちけさせ、祈禱ハト筮ハと、騒ぎ惑ひて、狼狽をども、

遂田に来らねば。今ハ如何ふともせんをべねく。泣くゝ此の
よし書よ志たゝめ。鎌倉へ使を駛て。夫主弓之助へ告知
志む。弓之助志の變なきくゝろ呆も果且駭き且怠ま。
一年明石の船よての風状不得意ゆゝずと顧しも。必
竟よきまで愛惜よ溺も。その査明をもふさで。姑息怠
慢ヒーーこを悔しけきと。ふゝく臍ゑ噬て。悶ゆきども甲
斐ゑし。さいあき今さら駒澤へ對して。何と謝辞あるべ
き。こも堂くたる武夫の身として。一端婚約せしふ。かくる
おとあまし。おてう白く地よゝうさるべき。こが辱門ハ
ともあも。深雪ゆゝ無状よて。當時賢者といとるく駒澤に
恥辱と與んあと千萬きのどくおまと。多方と心を傷しら

右思左想せしら。猛然一計をおもひたき。こを賢督の
体面と掩ハんため。一生一度の虚言ゑふべしと。家隷ど
もよ堅く守口如瓶して。驀使を差し。女孩兒深雪こと。
不意暴よ病て世ゑ早してべまぬ互よ哀傷よたへ侍ら
しゑのべさも。戒名をさへれくりけきゞ。駒澤次郎左
衛門ゆの訃音を聞よま、天を仰ひで長嘆し。不好了
し。我不肖なもども。騎長として國老の事を行
ひ。大國の權柄を掌よ握もま。さもバ近日よ錦を着て
故郷よ帰ま。真情比おき淑女と述好。俱よ榮貴を保
べうれもひしゆ。誰らくゝらん。一夕の枕席をも共よ
せず。條忽我を遺て。一個黄泉の路よ赴んしハ。凡

室女ハ氣の肩ゑ煩らゑ習俗。思想の餘ゑ病亡しゑ。憾むべし痛むべしと。声うち呑て。ほど〳〵血の涙ゑぞ流けるゑ。さきバ許配の婦人不幸あゑしと聞て。おの〳〵ち又陸續緣談といひ入者夥うゑけきども。次郎左衛門ハ情人已ゑ身まゑうゑしうへハ。誓て両田填房を娶るほしこいさゑよくいひ放ちて。續絃の念ゑ絶けるとゑん。

十二回　畸

さても深雪ハ蕗陵の邸を志のび出。只管東を指て走けるゑ。いつゑ刈萱の関の古跡をうち過。嬾松の汀をも北ゑ見て。程ゑく烏金磯といふ地方ゑいたる。這里まで八晝間かくき。曉霄の仄くらを間ゑ歩けるゑ。遲索るものゑ。その影たゑも看ざゑけり。深雪ハまゑ夜深ゑ起。蓐食て逆旅店ゑたち出。志の驛の郊垧ゑゑ後背ゑ顧きバ。五旬年紀の漢子ゑゑて。青春廿四五くらゐぼしき婦ゑ具し来るゑ。横雲の天ゑきバ。人顔ゑゑ分ゑわゑろげゑきど。大抵親子とハ志らきけゑ。這の漢子声をゑけて。阿姐ハ獨行と見ゆるゑ。天照廟ゑぬけまいゑせらるゑ。洒家ハ防州あたゑまで行もの歟ゑ。旅ハ伴侶ゑゑうせバ。お伴ゑゑ申べしと。懇ゑいゑ。深雪ハ立ゑゑまゑて。熟視ゑゑ。緊く老實さうゑる野叟ゑゑ。深雪いゑやゑ。正是ゑゑらく上國へのぼるもの。そきゑゑハ令愛ゑてべゑゑ。婦女どちハ遠慮もあらぐ。さわらば

小傳川の仗
して深雪を
犯んとするに
人ありてこれ
を救ふ

御行程の絆纏ともみてんと。うちはきてやく。那の野
叟が女子めくものハ。世ふきたる態して。うらはくもかさら
ひけるゆへ。深雪ハふゝく安堵てげて。ひさくてこやゝ倉
の城下ふいゝゝ。一間の茶店ゝ尻ゝけて。一盞茶時憩息ふ。
さの時那の野叟深雪ゝ耳語けるハ。さきゝて那邊ふ
文字が関ゝて。旅容をあらたむる批験所あて。ふ姐ハ往
来符牌をもちたまゝ。深雪いゝやゝ。さらハ遽の起程
ふてさる支度をもれし侍らず。野叟ハさきをくゝて。
眉頭ゝ臥蠶を起し。そハ不便ふるさとゝふ。符牌あらざれ
ば。這方ゝて水陸ともゝ通行ことかゝハず。さても不便と
いゝゝ。深雪ハほどく十方ゝくきて黙し居ゝゝ。

あて野叟いへらく。好了く。ふよき手段こそわん
ゝ。洒家親子が通券ゝ二人ゝきるせて。ふの二の字の
中ふまた一点を加へて三の字とれし。關吏をあざむき
やをくゝと通しまいらせんと。そのまゝ書加。またゝ出
てやゝら關の戸ゝいたて。ふの符牌を賜て何の苦もれ
く過をましけて。かくて深雪ハ那の親子の客人ゝ従
て隼人の峽門を渉て。赤馬が關ゝて着ふける。三個ハ
ふきゝて旱路を歴ていそぐほとふ。日あらぞ周防の
國小瀬川といゝ地方ゝちゝづきぬ。這里ハたゝそ百戸は
もくの小村落れて。那の野叟やくゝ深雪ゝ對て。這
里ハ老父郷里るきバ。緩く茅廬ゝ逼留して行路の

文のはたりの文間にしむべし。世豊豊翁として新意を圖せらるることと

疲勞とも憩めたまへ。そのうちふハよき夥伴も出来ぬ。浪速ふかく船の便とも聞出しまゐらせんふどまず〳〵懇よかさらふ已よ渠が家ふ来てそまバ莓封茅の宇端よハ。ねのづゝら胡蝶花生ていとゝびし。外面ゐる打麥場ハ。雞の雛ども求食あひ。狗兒ゐど戯き狂ひつ。そのとゝりとゝ黄櫨柿の墜紅散布て。ふまゝと蹈ハ電泓〳〵と鳴。野叟ハ背戸の繩簾をしゝけて入ゝ。婆々今歸来ハと音ふへハ。早かゝしと應て婆〳〵機を下たち髮搔撫ゝ出むゝへ。老人家什庄ぞよ紀鳥が羅〳〵と問よ。野叟ひそめきて。鳥も二羽まて獲ゞ。一羽ハ價よゐゝとゝうふものゝとゝやく。深雪も呼入らまて裏頭の光景を見まハせバ庭竈よゝて手桶ふ湯と泔いまて拿来ゝ。抹端よて盥盤よゝつ〳〵。姐々たち。さぞふ草卧たまハん。洗足したまゝ〳〵内房へ徙寛緩甘ぎて憩をたまへとゝ。深雪ハ農婦よ對ひて。ふハ勞汝ゐゝ。一路もふいまの御亭主の御勞煩よゐゝ侍と挨拶して。草鞋脚絆をほどくよ。皮肉腫浮て喰いゝたる紐の痕さへけきたゝ。伴の女と共よ一浴盤よて双足とあらひ。やとら厨房よ躪あがゝつ。婆〳〵ハ笑容可掬つくゝ。別房よ誘ひき。枕ゐどあてゝひ一椀の渋茶を拿来て。いよゐく欺待ける。深雪ハもとふまゝ深窓よひ〳〵ふゝ。萬事彷〳〵志く。什庄の心もつゝず

去て翁媼が深切をよろこおびけり。さきども伴の婦
とハ農婦が女子ふもあらぬ挨拶せるゆへ。ふらく又
いぶこうりおやぶむ。去の伴の婦いもと。小支那といふ
覇墨の柳巷の遊女なり。些はまらぬ去とのあるゆへ。
柳巷を出亡して小倉の方へ赴く所へ偶と那の野
叟よいでわひけり。那の野叟い權へ老實の態へ扮粧
せども。從来脱圈の吉兵衛と呼ぶ人肉經紀の骨
長れり。罠とも脱る蒼狐のおしき狡獪きしのるゆへ
土人も後へハ吉兵衛といむず。狐兵衛〳〵とぞ唱へる。
さきハ這の小支那ハ。那の狐兵衛へ拐掣きて伴ら色し
ぐ。小支那い自来遊女のふと形きハ。おくまて駢嫖へハ

にるものゆ、初より吉兵衛が囮戸といふことと猜
けきども。盤纏さへ心へまらぬとき形きハ。假意
さきたる風状と形しく。中ハ就てよき計較きを
こんと。ふらず顔へもて形して。這里まて從ひ来し
小支那ハ熟深雪が容止挙動の媳娜たる極て
影の今ハ愛なりと見てとり。今しも囮戸が裏とハ知て、
堵在こそ痛ハしけきと。明の日婆々がわらざる閑と
ひ。深雪へ耳語ていふやう。御身爪端の纖弱さ。
十人へハ在さしく。かく嫩艾御身へして。千里獨行と
しこもふハ。戀路へせまりてのふとくハ。門でもとく
よつて猜しく侍る。こが身ハもとより。往還の人へ折る、

墻の花。うき川竹のふがきふ漂よひ。世の浮沉と看馴
しりへ、この家の主翁をバとやくも囲戸とい知てそべる。
這の家ゑ入来ものハ總て不良ぬものゞゝ。符牌とて
渠等ゞ、隠語を聞侍るふ御身を高價ゑ活逆さんとの
頭数ゑ。御身今泥梨地獄ゑ隨たまへバ、とても解脱
たまふもとハゑ。ゞゝし、軈て鯢鯨ゑ筑紫の果ゑ。胡
笳吹く睦の奥ふゑる。賣渡さきたまひゑんあゑ痛ハ
しと涙くむ。識趣ほど哀傷ゑ勝やをし。深雪ハま
をを聞ゑ。作ち面土色のごとく。半晌呆て口ゑ
開ゑゞ。やゝあてとふゑ落る涙をはらひ。ハい恵ある
御語ゑ推量ゑたゞいと。さる仔細あゑて。情郎

ゑたづぬる獨旅。さても伴の野叟ハ囲戸ゑてあてけるゑ。
さあまバ今ハ籠中の鳥。雲井ゑ囲らん由もゑし。過
宿世の業ゑてあゑたらん。もとよゑも氷操をたてぬく
ゑが肚裏。そも故郷を出しよゑ。性命ハ捨て無ものと
觀念したまバ。機ゑ臨て死ゑ看るゑと。歸ゞおゑこと
賞悟ぞよ。ゑゑ看たまひゑと懐裏ゑゑ。とゑ出こう
護身小刀。試ゑ脱てるせば。明晃々たる鋭の光ハ
あざむくばかゑゑ。小支那ハゑばへず毛聳して。こすゞ
ハ武家の令愛君。潔よき御覺悟。さゑゑゑがら。死ハやす
生ハうさしとやら人。まさ一心ハ石とも徹すと承ハゑた。さ
ゑどせつゑる御戀路。運ハ仰靠龍天ゑゑ。御命だふ

ろ和らぎ。何處ぞのほどふい寛家よ。環會たまへ。
かるいぬまでも艱苦とちのび。身を完しておたづいの
を。今日るん主翁も。西貼壁よて。囮戸の夥伴どもと
團棄をふして飲燕しつ。今霄のうちふ逃をたまへ。
ちの舎の後方ハあとまれる蘆垣一重れて。潜出たまへ
ほどいっとらハ斫ゆどきて。看標の白紙をけけれきれん。
適間屋後よを眺やをたるふ。東北よあたをて。人烟熱鬧
き處ハ城下ゆをてれぼへ侍る。那方ふい官道もあをふん。
そと心當よしをたまへと。いと叮嚀よ教導を躡ようて。
深雪が。髷ふどの歯ともれをしつ。深雪ハほどく悦こひ
て。ふうきこ姐くの好意のほど。いつの世ふうハ忘るべきと。あ

ちく謝を申て雲鬢よ抹をたる印子の簪を脱とを。
ちふ。ふをと小支那よ與。些の人情をぞ表ハーける。
かくて深雪ハ。瞋やをき曠景をまちをび。窓よを前裁
の霜枯を眺やをバ。神無月ハ大うた。時雨ぐちれるよ
今日も時雨うちしていくぐものあいをれをけり。深雪ハ
獨柱よ倚をて居たるよ。入相の鐘鯱々と。遠近よ鳴度。
をや天晩の氣色孕。えもいをぬをろはそさふ。占しこ
とども以獨ぶち。雲井をたる。雁の翼もうらやまし
くぞれもいるく。ふの時まと一陣くらくと大粒の雨を
ちきちち。浦風おどろくふをく吹ぬのるふぞ。柳莖の類
鳴さやざて。もの冷ましきをををうれし。やがて

一盞の油燈を點し婆々は斜對戸より風呂よ呼れて出ゆきぬ登時遊女小支那い。深雪とひきたて。いざまの隙よ遁たまへと忙したつるふぞ。深雪いそぐろ喜びいさこ。そのまゝ屋の後よ志のびゆき。白紙の栞を見るうち。天の與と。やをらをし破りて出。辛うじて小渠を越。旬旬ちうて。隄ぞひよ走らんとをるよ。天色ハ墨をそうたるやうよ。東西とさへとさまへず。たつ死ぬきらぬ眞の闇。脚下ハ蘆葦叢よて。たゞ一條の仄徑なゞ。深雪ハ杖の料よ拔ちたる、墻竹を立て。地よ跪き。菅聖を一心よ禱て。志の節の葉つきの倒をし方を東と知らしめたまへと。念し完て。そのまゝ手を放し。葉つ死のかたをうねさぐりて。志をとたのを只顧足よ信せて走る。ふ。ともをまバ葭の刈株よて跟と傷つけ。血塗ふれて。疼得て耐ゞかをけり。時ぞうてあて後背を回顧バ。數多の炬ふ照し。罵して騦ぎて馳来るハ極めてこれ。をを逞来るものれをと。肝魂も身よ添ず。只走よ走ど。もとよりかよいき女の脚。追人ハ次叙よちうつきぬ。木枯の風いよ〳〵烈しく。刹那よ烏雲ゑ吹掃せバ。一籠の藪の透よをを。うち戰ぐ竹影ハ。金屑を篩うぶとくよて。洩出る月影よ洗し見をバいとわらハれる寒林蹤葉大やうれる石儼のゑ。儼然として立おいせて。さまバ樹躲をべき所れく。進退ふゝよ谷まをぬをべ。深雪ハ歎きてうち仰ぐ。天も

あハきゝ月蝕のまゝ仄ぐらくなるまさる。死をべき時ハ死せさきバ。死よまさる羞ゐと懐ゐる短刀を捜ふいつの間よりハ脱落て。今ハ寸鐵とも佩さきバ。よしさらバ。おの汝よ身を沈てや死ましと。濟曲の水の深慶をたづね礫を投て見てあきバ。音さへたゝぬ浅鹵なる。さらバ縊て死をべしと。下括をほどきて。幸と江よのぞたる柳の垂朶よりちかけ。圏児をけくるて標をおめ阿呀崖よ飛吊んと。南無と一声呼ぶ時。この湾曲よ候泊せし千艘船のあるしゞ。おの船の客人よ。念佛者と見えて。程近き村落の十夜よ参る。抵今ゝゞ船よ回り来り。隻手ハ小提燈を提。隻手ハ珠數ゆぐりて。南無阿弥陀仏南無阿彌陀と。唱へ来るし舶主の拍子よ。今深雪が南無の一声と聞縊死と看るよる。矢庭よ飛ゆくるて。抱きとめ。縊縄をさへ奪ひて。月光よ照しゝ見もバ。十七八の麗人ゞ。年ふる柳の下ふあるて。十指合せて。縊縄ふとゝ吊下らんとせしところおる。那の客人多方と深雪をおだめ。あらまし死をべき縁故を耳。已ゞ名所をもあゝし。目前見殺をるハ何とも痛ましく思ひゞゝし。些の散財ハ従佗。後果のためふ。おの老人ゞ救護ゆゝさんと。叮嚀よへたハるうち。とや遅うけ来る者ども馳ゆさて。口くふ罵ふる。緊要の奇貨を捧ふふらんとせしとて。直よひったてゝひおぞり往んとせし。

金銀出入帳
大福帳

古八の右衛門
源蔵ハ若衆
せゝとせめは
たろ

那の手翳船の客人とけ入て。種々噯ひ懐中の財布よ
り。金子をとり出し。那の罠脱の吉兵衛をとらせ。
三片ぐらをを捉捕の者どもふ迎典。無難事と完し。
深雪を伴囲。船頭を呼起し。仔細あまバ早く船を出
せと催促る。船子ども心を得て。そのまゝ鉄猫ひきお
げ。遠つ灘へと漕出す。深雪ハ弘誓の船の扱と得て
囲戸ゲ鰐の口と免らも。念佛者の老人の功徳と嬉き
死も地獄よて佛よ遇し心地せを。恰好順風つよくふ吹
出せバ。やゞて篷と拽あげ。五六合もたせて。唯一夜の内ふ
數十里を走を。播磨の室津ふぞ着ふける。ふの客人と
ゝい。這の室津の迷魂陣の亡八よて。駿の妓を養嫖客
と待ふ過活とせる。一座の花院の主翁ハを、舗号と大
黒屋とし。名ふ吉兵衛とゝふ。這の吉兵衛ハ生を得る没
一眼ふるもへ。耶の吉兵衛と綽名せを。もとふの吉兵衛ハ。
橛丁のふとれをバ。常よ田舎経歴して。妓子買よ罷し
う。防州小瀬川ハ。囲戸女還の巣穴れをバとて。ヒくゝう這
の處よ来を居て。その奇貨と穿鑿せしよ。頃罠脱の孤
兵衛ゲ。匂引して両個の女と伴来たをしもへ。密よ覘ひ
相て。そや價定よりをしゲ。這の渡世よ狡猾耶抑巷の
落第の蒼妓い望まず。只處子の深雪をほしかを。多方商
量をるよ。孤兵衛い。深雪ゲ身價と五十両よをハ減まじ
といひそりけるさをども耶ハ中く合点せず。皓歯ハ由

ある奔女ゐて。強て苦界とせんとせバ自害し果て。原價までも図圖烏有とき。の説話ゑ枝葉つきて。已ゑ破談ともふるべきを。牙僧ども種々と唆居る時しも罠脱ゞ婆くい。晝間小支那と深雪ゞ。耳語わひしことを壁耳せしゝ。口囂き惡婦のれらひ。湛うねて両吉ゞ價論の坐ふてしてゑきて。一五一十告けるゆへ。鬼と欺く眇の吉さきゑたけこそそのまゝ三十金ゑ買落し。さて件の演劇と草曲意と假造ぶとして。虚念佛者とれてて如せしハもと這の聊吉ハ。夫ゐて子ゐる中とさへ裂しゆて買取。種々奸計と運らし。如何ふる鐵肝石心の婦人たりとも。うまゝ苦界ゑ隨しむる。老賊れゆへ。ゐる造てゑおとして深雪ゞ必死を救ひ。ふゝく恩を擔せ。よんどころれき義理ゑ迫て苦海ゑ溺んと巧計しものふて。深雪いかく歎うきしゝい夢ふもきらず世ゑハ慈悲善根の種々萌念佛者もゐるものうふと。れもひの外。渠ゞ家のさまと見きバ。まさふ風月場とおばしくて。駒の姉妹の粉頭ゞもゝ。めざましく脂粉と疑し。媚と献し笑と賣ふゆへ嫖客旦夕入集合ていと熟鬧。深雪いきの光景を見ゑて胸とうつてその薄命を歎き。又しもかく行先ざきふる。艱難ゑきのびうね。敷田ゝ死路を索しうど。とふゝくふ支那ゞ訓と守ゑ。生、かたしとおもい田し。さしこむ痞とそれさへける。大黒屋吉兵衛ハ。老婆のれ六と熟く議て。夜

又めく虔婆ふよく〳〵吩咐けるよ。虔婆はいまとゑ諾
別房よ籠ゑ居たろ深雪よ對ひ。家主がその死と救ひ。
天大の財を費せし。恩誼のほどと口説たて。そをを償ふ
料よい。半年乃至一年ぐらゑも。苦界ふ出らまよ。僥倖
ある財主の。半老子弟よ。梳弄のこと約せし由を語ゑ。
多方賺し瞞し。あるい嚴しく催逼ふどをきども。深雪ハ
一切承引ず。艶然としていやうゑ。そハ心ゑ得ぬふとうふ。
ゑが一命を助けらをたるハ。慈悲ある家主の好意とこ
そおもいつを。さる佛意き言ハ聞さへ耳汚をくべるふと。
雉子搏ふる態ふまバ。虔婆ハ深雪が執意を恚〻。只得
坐とたちて家主夫婦よおのよしと告げをバ吉兵衛聞

よゑ大をふ怒り。洒家若子の金子を費やし。頗の
辛勞して買取来ゑしハ全く本院の聚寶盆よせん
ためゑ。允ぬとて允さずよ終さうと。眼を忿らし
て虔婆を叱ゑ。そを早く厮を贏よふし。れもふさま
削刀鍼を刺よふど氣喘々。鴇子れ六ハ慌丈夫よ撑
住。かくらずしもとやまゑたまへふ。且雲時待たまへ
那の小姐ハ麼々の武弁出身と見あるを強よ呵責た
まいで。舌嚙切ても死うねまじき擧動ゑ。さある時ハ
損よ損を累る道理。まづ奴よ任せたまへ。今一回諭し
見侍ゑてんと。漸宥め課て。已が縫房よ深雪を呼よ
せ。見をバそるやど鴇たげよ。その容止の貴よ艶く。心可

羞態をしたる。お六やう和御寮ハ今三十金餘の價
貨とおもへたまへバ。そをを償ふ資あらすハ。少間苦
界ふしたまハでハかるべまじ。さるを公然もいて在し
けるこそ心得ぬ。虔婆どもハ鬼くもものふて。今御寮
ふ憂目を見せんと犇ぬると。辛くてくめ侍るを。和
御寮ハそも如何ぬる人よて如何よおほさるくやと。いと
温和ようら問バ。深雪答てくやう。とらくくしろ
もの〳〵女児ふる。縁故あるて只單身。郎を尋ねて都方
へ登るもの。最その人といまゞ枕ハかをねど。一回盟約て
しらへい。水火を踏ても偕老んとねもひてべる。さのまバ
いふふ責たらを。縱令段々ふ斫きざまるくも。氷雪よ

るる潔よき心の身をあでう汚すべき。いつそ前の夕縊を
死ふバ。かくぐうる可惡語ハ聞まゝきふ。自来死を待覺
悟ふをども。おをの家主の散財のを。一個の遺憾よもひ
侍る。奴々倘佛心あらバ。情願債をふばし猶豫さて。
家もの不満を宥らを。許して帝都へ上せてさく。尋る
郎よ會面しらへい。金子ハ信して還しそべらん。さもあ
バ。折角小瀬川の汉よて。必死ををくひ給ふ。功徳も水
ふるるハせド。奴々の厚き庇をバ。いつで生涯忘をんと
涙と共よかきくどく。却是ハ識趣の亡八のお六。深雪が
貞心感ぜしらへ。そのるおとも理ふをバ。快く諾ひて。いか
ふも和御寮の肚裏おしるるまいらせて。痛ハしく

おそおもひ侍を。吾們もくる軽賤過活ハ做ども一是不知人情ふもとうらハず。犬夫ゞ眼前ハよきふいひふし。きかるべう野置侍らんと。ふを懇ようち語らふ。お六ハ深雪ゞ起たるあとよて。吉兵衛と相對百般と利害を解き深雪ゞ義烈を委く語り。那の小姐の氣象の猛しさ。一心戀よ凝て。石よもれをるまゝき貞女精神。強て迫らバ死を催るとふものれを。周防の女還を捉来て。いうふ説話すゝ報賽已過。這方よも影護さとあきバ。凌虐ちゝハれをがさし。あの児ハ極めて世裔の愛女児ふらん。寧籠をあけて放ちやを。尋ぬる人よ遇せふバ。金子ハ定てうへとるべし。よしまゝと萬よ一個齟齬たるその時ハ

奴ゞ。四季の新穿を製まひほとよ。そまゝ以もて損まくハ一番奴をたて。允容て恕てやらきやとふ助の吉兵衛ハ。もとふを事ふ熟せ一有名の奸獪折角小瀬川よて。十夜歸の演劇を做せ。人を騙寸圏套も徒ととハれをたまども。とてもこの術てもうぬ奴。倘万一迫を殺ゝてハ。半文銭よもふらぬ乗除。且得意の丈婦のゝふところ。緊の了簡れをと一決して。一向齊と蹩懇切よて。放ちやるふきゝと。意と曲て菩薩面をつくり。夫婦もろとも。種々ふ款待。幸よき便船を聞出ゝ。艘工も入魂の者よて老實ふまバと。きを托をて深雪を載ゝ。浪花まて送羞さんと。萬信くゝく經宮ゆ。

深雪もまと亀婆ち六ゞ庇の遭難ふよりて、奇難を免かも。剰ふゝきその懇と受しゝバ。別よ臨て何とゝる心ばゝゝの謝儀とゝさんと。旅の調度を捜せども、小瀬川伝道し時包袱ハ遺かさつ。家を出る時ハ影の人目伝忍びいね。髪の飾も取る間おく。僅よ家常の櫛と印子の替を掛とるやゝふて奔ゝ。別よ價のわる東西もあらねバ。唯一枚の玳瑁の櫛子をバ。お六よ與て別敬とぞきたゝける、

朝顔日記巻之五　終